

れば、今日水さへ濁て、渡る瀬も見えざる事かと云ければ五郎是を聞いまだしろめさずや、罪人河を渡れば三途の水濁ると承る、我等が爲には鞠子川こそ三途の大河、箱根の御山こそ死出の山よ、鎌倉殿は閻魔王、敵に逢ん所こそ閻魔王の廳よ、數千人の武士共こそ、牛頭馬頭阿修羅刹にてあれとて打瀬しける、十郎向の岸に打上りて、

五月雨に淺瀬も見えぬ鞠子川波にあらそふ我なみだ哉、五郎も同じく、  
渡るより深くぞ頼む鞠子川親の敵に逢瀬とおもへば

〔十六夜日記〕まりこ河といふ河をいとくらくてたどりわたる、こよひはさかはといふ所にとまる、明日は鎌倉へいるべしといふなり、

〔梅花無盡藏〕出關本宿糟屋是日渡鞠子河相州

最乘寺畔出民家鳥促晨炊小雨斜、毬子長河輕蹴渡水煙如柳浪如花、

〔廻國雜記〕まりこ川にて誹諧略歌 小田原につき侍れば略中さきのたび渡りける鞠子川を、又と

をるとて誹諧、

まりこ川またわたらる瀬やかへり足

〔扶桑拾葉集〕二十八あづまの道の記

藤原光廣

廿八日、小田原を立、まりこ川といふ有するがにも同名有、さかは川といふをわたる、是を菊川といへり、北より南へながれて海に入、

〔人見雜記〕小田原の東、まりこ河あり、駿河にも同名あり、さかは河を渡る、是を菊川といふ、

〔東海道名所記〕酒勾川、富士のすそより流る、常に歩渡り、冬は土橋をかけらる、此川左のかた一町ばかりにして海に入なり、追はぎおはし、夜ぶかに出べからず、

〔諸國道中袖鏡〕まりこ川、近年洪水にて、酒勾川と一流になりて、今はなし、さかは川、かちわたり、冬